

子どもがかかわり、子どもに還る

学習評価

カリキュラム・マネジメントをテーマにしたシリーズ第3弾として、今号は「学習評価」を取り上げる。

学習評価は、子どもの成長に結びつけるために行うものであり、

教員の指導改善と子どもの学習改善に生かせるようにすることが大前提になる。

小学校の新学習指導要領の全面実施を目前に控えた今、これからの学習評価のあり方を研究者・教育委員会・学校長の三者による座談会と、小学校3校の実践事例などから考える。



新学習指導要領における 学習評価の基本的な考え方

新学習指導要領の学習評価は、現行課程と比べてどこが変わり、どこが変わらないのか。
文部科学省 国立教育政策研究所発行の「学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編」に
示された内容などを基に、新しい観点別学習状況評価の基本事項について整理した。

「何を見取るのか」を意識し、 多角的な評価を

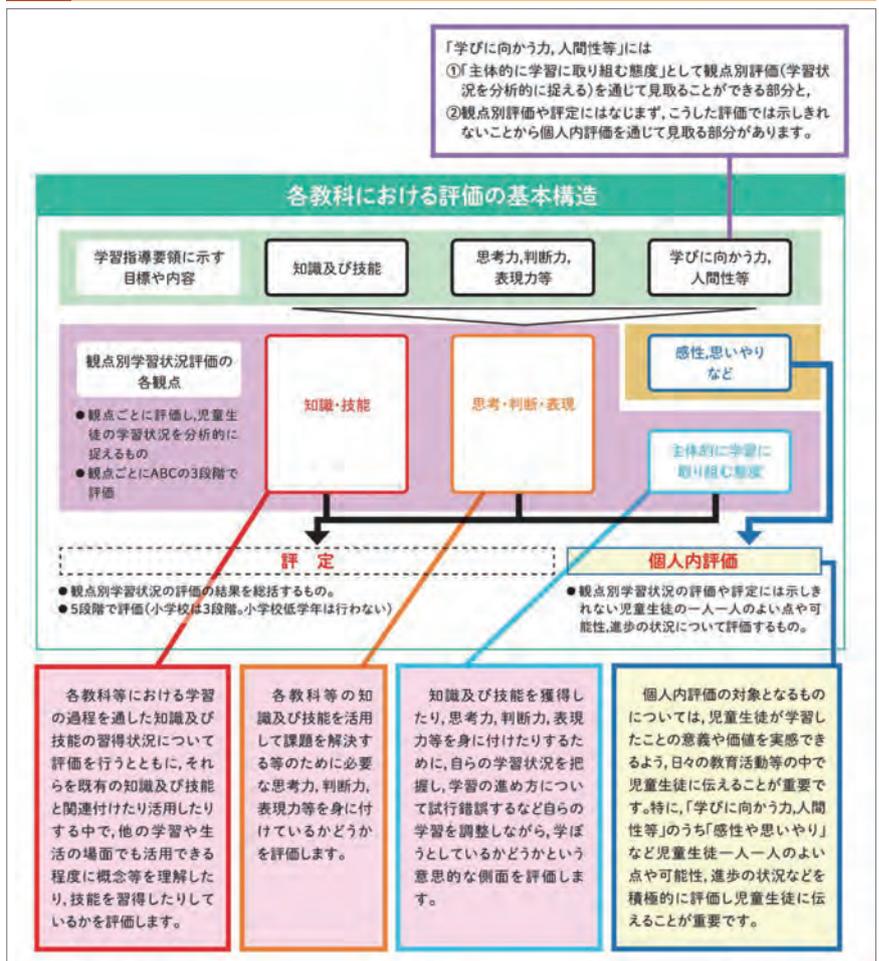
新学習指導要領における学習評価は、主体的・対話的で深い学びの観点から授業改善を行う際の重要な役割を担うものとされている。これは、学校現場におけるこれまでの実践の延長線上にあると言える。

一方、従来のやり方の中で、「必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと」とされている*1。次年度に向けて学習評価のあり方を検討する際は、働き方改革の視点も踏まえながら、各学校におけるカリキュラム・マネジメントのPDCAサイクルを意識した工夫と実践が求められる。

今回、学習評価の観点が4つから3つに変更されたのは、各教科の目標や内容が資質・能力の3つの柱で再整理されたことに対応させるためだ(図1)。指導要録*2に記入する評価の観点も、現行では教科ごとに異なっていた文言が、全教科で統一された(図2)。

3つの観点のうち、「主体的に学習に取り組む態度」は、現行の「関心・意欲・態度」と同じ趣旨ではあるが、「自らの学習を調整する(自己調整学習)」というキーワードを押さえておきたい(図3。自己調整学習についてはP.22~23参照)。この観点を適切に評価するためには、これまで以上に、学習のめあてや見通しを子ども

図1 学習評価の基本構造



*文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編」をそのまま掲載。

も自身に考えさせたり、学習の最後に振り返りの場を設けて目標の達成状況を自己評価させたりするといった工夫が必要だ。学習の途中でそのやり方などを調整しているかを見取することも大切で、単元などのまとまりを通して、子どもの内面の変化を表出させる指導の工夫が求められる。

今後、具体的な評価規準や評価場面を検討する際は、どの資質・能力のどのレベルを測ろうとしているのかを意識することが大切となる(図4)。子どもの学びは連続している。評価の視点を広く持ち、評価の結果を子どもの学びの改善にどうつなげていくかという視点を忘れずにいたい。

*1 中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(2019年1月21日)。

*2 ここでは、文部科学省「小学校児童指導要録(参考様式)」を意味している。

図2 新旧の指導要録と、3つの観点の評価方法

各教科の学習の記録																
教科	観点	学年	1				2		3		4		5		6	
			1	2	3	4	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
国語	知識・技能															
	思考・判断・表現															
	主体的に学習に取り組む態度															
	評定															

↓ 教科ごとに異なっていた観点を、全教科3観点到統一

◎3観点それぞれの評価方法

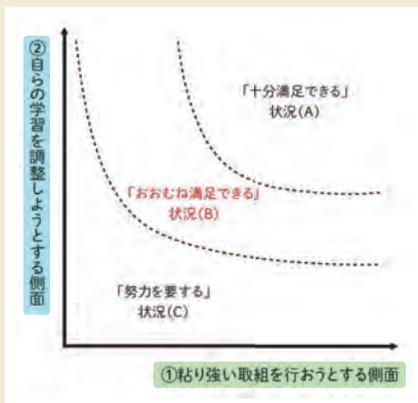
知識・技能 現行の「理解」の観点も含めることに注意。例えば、ペーパーテストで、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスへの配慮、記述式問題や式やグラフで表現する問題の出題など、多様な方法を適切に取り入れる工夫が必要。

思考・判断・表現 3つの要素それぞれを、別々ではなくセットで評価する。ペーパーテスト以外にも、論述やレポートの作成、発表、話し合い、作品制作などの多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりして評価する。

主体的に学習に取り組む態度 ノートやレポートなどの記述、授業中の発言、行動観察、自己評価や相互評価などが材料となる。各教科等の特質に応じて、子どもの発達段階や個性を十分に配慮し、「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点的状況を踏まえた上で、評価する必要がある。

*文部科学省「小学校児童指導要録(参考様式)」を抜粋してそのまま掲載。

図3 「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ



◎①と②の2つの側面から評価する

①粘り強い取り組みを行おうとする側面

知識・技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力等を身につけたりすることに向けて、粘り強く取り組みを行おうとする側面のこと。

②自らの学習を調整しようとする側面

①を行う中で、自らの学習状況を調整し、学習の進め方について試行錯誤するなどの意思的な側面のこと。子どもがそれを主体的に進められるよう、自己評価・他者評価の場を設けることが重要。

「主体的に学習に取り組む態度」は、現行の「関心・意欲・態度」と評価の趣旨は同じである。しかし、挙手の回数やノートの取り方など、子どもの性格や行動面の傾向で評価をするということではない。①粘り強い取り組みを行おうとする側面、②自らの学習を調整しようとする側面から、子どもを見取るということだ。そして、重要なのは、①と②が知識・技能、思考力・判断力・表現力等の獲得に結びついていない場合、教員が机間指導などを通して適切に指導するということである。

*文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編」を基に編集部で作成。

図4 現行の4観点の評価実践の傾向と、新しい3観点の評価実践の方向性

能力・学習活動の階層レベル (カリキュラムの構造)	資質・能力の要素(目標の柱)			
	知識	スキル		情意 (関心・意欲・態度・人格特性)
		認知的スキル	社会的スキル	
知識の獲得と定着(知っている・できる)	事実的知識、技能(個別的スキル)	記憶と再生、機械的実行と自動化	学び合い、知識の共同構築	達成による自己効力感
知識の意味理解と洗練(わかる)	概念的知識、方略(複合的プロセス)	解釈、関連づけ、構造化、比較・分類、帰納的・演繹的推論		内容の価値に即した内発的動機、教科への関心・意欲
知識の有意義な使用と創造(使える)	見方・考え方(原理と一般化、方法論)を軸とした領域固有の知識の複合体	知的問題解決、意思決定、仮説的推論を含む証明・実験・調査、知やモノの創発(批判的思考や創造的思考が深くかかわる)	プロジェクトベースの対話(コミュニケーション)と協働	活動の社会的レリバンズに即した内発的動機、教科観・教科学習観(知的意向・態度)

左図は、資質・能力の3つの柱を、「知っている・できる」「わかる」「使える」の3段階に構造化したものだ。それに、現行課程の4観点と、新課程の3観点的領域を対応させ、3観点的で評価する領域をイメージできるようにしている。また、評価方法として、知識や認知スキルの習得状況をみるのであれば、穴埋めや選択式のテストで評価できるが、社会の中での活用力を問う場合には、実際にタスクを課して評価することが適切になる。

4観点 (緑線) 3観点 (赤線)

*石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』(日本標準、2015)、を基に編集部で作成。